

介護老人福祉施設における高齢者と伴侶動物の共生のための支援内容

—介護職員への個別インタビュー調査結果の SCAT 分析—

田島明子^{1)*}・安藤孝敏²⁾・押野修司³⁾・安野舞子²⁾

- 1) 湘南医療大学
- 2) 横浜国立大学
- 3) 埼玉県立大学

Details of Support for Coexistence of Elderly and Companion Animals in Long-Term Care Facilities for the Elderly: SCAT Analysis of the Results of Individual Interviews with Nursing Care Workers

TAJIMA Akiko^{1)*}, ANDO Takatoshi²⁾, OSHINO Shuji³⁾, YASUNO Maiko²⁾

- 1) Shonan University of Medical Sciences
- 2) Yokohama National University
- 3) Saitama Prefectural University

1. 目的

高齢期において自立した生活が困難になる中で、多くの高齢者が生活場所の移行や画一的な共同生活を経験する。誰でも人生の最終盤に幸せな時間を過ごすことは願いであろう。その実現のために高齢者施設において意味や価値のある重要な作業の実現（作業権の保障）が目指される必要がある。伴侶動物（CA）と共に暮らす意味には主観的幸福感、強い情動的関係性による現実的感覚の獲得、孤独感の解消、人間関係の拡大等が指摘されているが、CA とともに暮らせる介護老人福祉施設は日本国内にほとんど存在しない。しかし今後、介護老人福祉施設における高齢者と CA との共生の実現は欠かせないと考えた。本研究では CA との共生可能なユニットを設置し、10 年が経過した A 介護老人福祉施設のケアスタッフを対象として個別インタビュー調査を行い、CA との共生を高齢者施設で実現するための体系的な支援内容について明らかにすることを目的とした。

2. 方法

研究協力者：A 施設は、2012 年から CA（犬・猫）との共生可能なユニットを設置しており、支援の蓄積がある。そこで A 施設において CA と共生可能なユニットに勤務する介護職員を対象とした。施設長より

本研究の趣旨を説明し、研究協力に同意が得られた 4 名とした。

方法：研究協力者に対して個別的・半構造化インタビュー調査を実施した。インタビューは 2023 年 2～3 月に実施した。インタビュー時間は 45 分程度であった。インタビューはプライバシーの守られる施設内個室にて行われた。すべて録音し、音声データを逐語録化したものを分析対象の質的データとした。質的データは、SCAT (Steps for Coding and Theorization) による分析を行った。SCAT は、分析手続きが定式的・明示的であるため質的データから支援内容の概念化を目指した本研究に適していると判断した。

倫理的配慮：本研究は、筆頭筆者の所属機関における倫理委員会にて承認を得た後に実施した（承認番号：医大研倫第 22-027 号）。

3. 結果

1) 研究協力者の基本情報

表 1 のとおりであった。

2) SCAT 分析の結果

4 名から得られた理論記述は表 2 のとおりであった。

4. 考察

A 施設では、犬・猫のユニットのみであるが、CA

* 連絡先：akiko.tajima@sums.ac.jp

表1 研究協力者の基本情報

	A氏	B氏	C氏	D氏
所属ユニット	犬・リーダー	猫(犬ユニットの経験あり)	猫	犬
年代・性別	50代・女性	30代・男性	50代・女性	20代・女性
介護職経験	24年	10年	9年	3年
動物ユニットでの経験	犬:7年、リーダー	犬:2年 猫:4年	猫:9年	犬:3年
動物の飼育経験	なし	犬を飼っていた	猫を飼っている	なし(犬を飼いたかったが、環境的に難しかった)
勤務時間帯	日中・夜間	日中・夜間	15～19時	日中・夜間

表2 4名の理論記述

A氏	<ul style="list-style-type: none"> ・「集団性が活かされた動物と人の幸せな共生のかたち」を常に考える ・「ユニット内の清潔保持」をする ・「最期まで動物本位のケアを志向」するために「個性を重視した健康維持のための生活マネジメント」を行う ・「個性を重視した健康維持のための生活マネジメント」を行うために「人間本位な餌やりの抑制」をする ・「個性を重視した健康維持のための生活マネジメント」を行うために「犬にとって休息できる場所・時間の確保」をする ・「個性を重視した健康維持のための生活マネジメント」を行うために「犬のストレス軽減のためのケアスタッフ間での統一した実践」をする ・「個性を重視した健康維持のための生活マネジメント」を行うために「ケアスタッフ間での細やかな情報共有と統一的なケア実践」をする ・必要に応じて「他機関・地域の人との協力・連携」をする ・「人と動物の交流機会の重視」をし、入居者同士の「動物への愛情の共有」に配慮する
B氏	<ul style="list-style-type: none"> ・「犬と猫の特性によるケア方法の違い」を明確化する ・「動物の行動に対するリスク管理の視点」を持つ ・「規則的な生活ケア」をする ・「ケアスタッフ間での細やかな情報共有と統一したケア実践」をする ・「個性を重視した健康維持のための生活マネジメント」をする ・「猫がストレスに感じない距離感を保つ」配慮をする ・入居者同士が「動物への愛情の共有」ができる工夫をする ・ケアスタッフ自身が「看取り実践と死に直面した際の感情コントロール」を必要とする
C氏	<ul style="list-style-type: none"> ・「集団性が活かされた動物と人の幸せな共生のかたち」は、「動物への愛情の共有」をする「動物への愛情に満たされた空間」である ・入居者に対して「動物を活用した生活リハビリ」が可能である ・動物へのケアは、「犬と猫の特性の違いによるケア方法の異なり」を踏まえ、「規則的な生活ケア」とともに「ケアスタッフ間での細やかな情報共有と統一したケア実践」をする ・「猫との良好な関係性づくり」のために、「猫がストレスに感じない距離感を保つ」ことを意識する必要がある ・「認知症の人と動物の関係への配慮」を必要とする
D氏	<ul style="list-style-type: none"> ・「犬との良好な関係性づくり」をすることで、「犬の行動の規制や補助」をしやすくなる。 ・「認知症の人と動物の関係への配慮」が必要である ・「看取り実践と死に直面した際の感情コントロール」はケアスタッフにとって困難を感じる場面であり、「ケアスタッフ間で学び合う機会づくり」が必要である

(犬・猫)との共生についての支援内容として、「個性を重視した健康維持のための生活マネジメント」のための「ケアスタッフ間での細やかな情報共有と統一的なケア実践」が重要であり、「犬と猫の特性によるケア方法の違い」を認識し、「犬・猫との良好な関係づくり」をしつつ、入居者同士の「動物への愛情の共有」をサポートし、「動物への愛情に満たされた空間」を保つことで「集団性が活かされた動物と人との幸せな共生のかたち」が創られると考えられた。

5. 謝辞

本研究は、公益財団法人 SOMPO 福祉財団 2022 年度ジェロントロジー研究助成の支援を受けたものである。

6. 利益相反

開示すべき COI はない。